

## 菊池寛の通俗小説における近代家庭の女性

朴 嫻榮

### 1. はじめに

1920年代中盤になってから日本のメディア市場は、その先頭にあった新聞や雑誌を中心にして急激に広がっていく。時代的背景と絡まった殆どどの当時の言論は、政府に対する監視とか批判を行ったわけではなくて、政治的な見解を排除して国民の興味を集めることに力を尽くした。こんな状況の中で新聞社や雑誌社は、発行部数を増やすために通俗小説を連載し始めた。以降通俗小説のブームは新聞と雑誌、出版市場を拡大させ、近代日本のメディア界を新たに構築するのに一助になったのである。

今までは通俗小説の研究は文学研究の正道ではないと見なされてきた傾向が多少あったが、通俗小説は当時の大衆の生活や流行、世間をそのまま反映したという意味で、我々に新しい観点を与えているという面から、近代の様子が見取れる新しい道具として理解することができる。その意味で数多くの通俗小説家の中でも特に注目される作家が菊池寛である。

本格的な通俗小説『真珠夫人』をはじめとした彼の小説は凄い人気を集め、紙面メディアの範囲を越えて映画という新しいメディアになるのに至った。この総ての過程の中で彼の通俗小説は‘近代日本’のイメージを作りだし、それを固着するのに大きな役割を担当したのである。

彼の小説は連載の形によって中産階級意識と大衆文化と共に大衆に近づけることができた。小説の中の類型化された登場人物、女性と男性、その底にある階級性、そしてそのような社会問題を巧妙に希釈するカタログのような溢れ出す流行のコードは、当時の大衆からの声援をもらえるのに十分だったのである。すなわち菊池の通俗小説は関東大震災の後再建された近代都市東京の様子と大衆の欲望をなまなましく描いたものである。

本稿では菊池の通俗小説が正しい家庭の様子を提示することを目的にする家庭小説の脈を継いでいるという点と主人公とターゲット読者が女性である点から、彼の小説のなかで女性がどう描かれているのか、そしてどう変わっていくのかを注意して見ようとする。特に、主人公の女性たちの動きが家庭を大きい軸として決定されているので、女性が家庭の中でどのように位置づけられているのについて考える。

対象作品は画期的な通俗性で読者の反響を呼び起こした大正期の『真珠夫人』(1920)と、有産階級と無産階級が対照される設定で大きな人気を集め、様々な形で変奏された昭和期の『東京行進曲』(1929)である。

### 2. 『真珠夫人』の瑠璃子

『真珠夫人』は菊池寛が1920年6月から12月にかけて「大阪毎日新聞」と「東京日々新聞」に連載した長編小説である。菊池寛の最初の本格的な通俗小説でその人気は実に物凄いもので、新聞の読者層を女性まで広げて後の夫人雑誌のブームに影響を与えたとも言える。特に通俗的な要素がたくさん含まれていたストーリーと、既存の小説で登場した新しい女性とは少し違った妖婦‘瑠璃子’という人物が人気の大きな要因であったことは言うまでもない。

男爵の令嬢である瑠璃子は、何もかもお金で解決しようとする成金の荘田勝平の計略に巻き込まれた父親を救う為に勝平の妻になることを選ぶ。しかしその選択は初恋を奪った勝平に対する軽蔑と社会に対する復讐のために行われたことで、結婚の後瑠璃子は完璧な妖婦に変わって勝平を弄んだ。結局勝平は息子と娘を残して死に至ってしまう。その後瑠璃子はサロンの女王として君臨しながら青年たちからの求愛を受ける。しかし瑠璃子を見るには完璧な妖婦なのであったけど、実は勝平の娘である美奈子をまるで本当の妹みたいに愛してくれる優しさを失ったわけではなかった。このように妖婦でありながらも、そこまでは致命的なものではないからこそ、瑠璃子という女性は当時の大きな話題になっていた新しい女に同調と反感を同時に持っていた読者たちの心に響いたのである。

菊池は瑠璃子という女性をもっとドラマチックに作るために旧約聖書のユデトを立たせる。勝平の悪巧みにひっかかった父親の前で瑠璃子は「妾は、ユーチットにならうと思うのでございます。」と宣言する。勝平と結婚しようとする決意をユデトになると表現することで、これから‘ユデト’という人名はより大きい意味を持つようになる。このユデトは瑠璃子という女性を代弁する一つのキーワードになる。

ユデトは瑠璃子が父親に説明したとおり、窮地に追われた都市を救うために女性の身で敵将のホロフェルネスの命を奪った英雄で、これに関する物語は旧約聖

書の外典『ユデト記』にある。瑠璃子が勝平との結婚を決心した理由は、ユデトのように自分の犠牲によって‘幾万の同胞の命と貞操とを救う’という使命を感じたからであった。

次は瑠璃子が父親にユデトになろうとする理由を説明する部分である。

「お父様！お考へ違ひをなさつては、困ります。お父様の身代りにならうなどと、そんな消極的な動機から、申上げてゐるのではありません。妾は、法律の網を潜るばかりでなく、法律を道具に使つて、善人を陥れようとする悪魔を、法律に代つて、罰してやらうと思ふのです。一家が受けた迫害に、復讐するばかりでなく、社会のために、人間全体のために、法律が罰し得ない悪魔を罰してやらうと思ふのです。お父様の身代りにならうと云ふやうな、そんな小さい考へばかりではありません。」<sup>1</sup>

「結婚は手段です。あの男に対する刑罰と復讐とが、それに続くのです。」<sup>2</sup>

ここで瑠璃子がなぜ莊田家の人になろうとするのかわかる。瑠璃子は個人的な復讐を越えて、勝平という人物で代表された軽薄な成金へ、さらにそのような人によって乱れた社会への復讐のために結婚することを決める。以後、瑠璃子が妖婦にならざるを得なかったことを菊池はユデトという女性を引き込んで説明するのである。菊池は本来未亡人であるユデトを犠牲精神の満ちる美少女に造形した。ユデトは瑠璃子に美しく強い女性というイメージを与えて、瑠璃子の行動を正当化させる機能をする。すなわち菊池が作ったユデト像は結婚の後勝平を死に誘った瑠璃子の妖婦のような行動がどこから始まったのかを説明していて、同時に瑠璃子が何も知らなかった男爵の令嬢から強い新しい女へと変っていくことを意味する。社会正義のために初恋を諦めて、巨富であるが皆に軽蔑される男性のもとへ行き、貞操を守りながら彼と彼の息子を弄ぶ瑠璃子は、まさに読者を熱狂させるのに十分であった。

しかし勝平の死は瑠璃子にとって社会悪に対する刑罰の完成にはならなかった。次は勝平が目前で死んでゆくのを眺める瑠璃子の心境を描いた部分である。

悪魔だと思つて刺し殺したものは、意外にも人間の相を現してゐる。が、刺し殺した瑠璃子自身

は、刺し殺す徑路に於て、刺し殺した結果に於て、悪魔に近いものになつてゐる。

自分の一生を犠牲にして、倒したものは、意外にも倒し甲斐のないものだつた。恋人を捨て、処女としての誇を捨て、世の悪評を買ひながら、全力を尽くして、戦つた戦ひは、戦ひ栄のしない無名の戦だつた。

負けた勝平は、負けながら、その死床に人間として救はれてゐる。が、見事に勝つた瑠璃子は、救はれなかつた。

死ぬ前に瑠璃子に容赦を求めながら娘の美奈子の後のことを頼む勝平に対して、瑠璃子は痛快に感じるよりも悲哀、勝利の喜びよりも敗北の気持を喫する。それほど憎んでいた者が死んでしまうと、瑠璃子は慌てる。ユデトにならうと宣言した復讐への誓いは、実際その相手が亡くなった瞬間色褪せた。

その代わり瑠璃子が新たに悟つたのは家族への愛であった。死の瞬間、子息に対する限りない愛を見せ、案外の間味を見せた勝平に瑠璃子は感動する。そして勝平が頼んだとおり、瑠璃子は美奈子のことを義理の娘ではなく、本当の娘のように思う。勝平を弄ぶことで彼の家庭を含む総てを揺らそうと莊田家の人になつたが、かえって家族に対する愛を感じて莊田家を守る役割を演じることになる。未亡人になつたが貞操には何の問題ない瑠璃子が、莊田家から逃げなくて莊田家の新しい家長になつた理由は、美奈子への愛のためであった。美奈子に相続される勝平の財産を無事に守らなくてはいけないからである。

瑠璃子が演じた家長としての役割は、自分は世間に妖婦であると知られても、美奈子だけは貞淑な女性になるように努めることであった。これは勝平のそれと全く同じもので、瑠璃子も死を迎える瞬間、勝平のように直也に美奈子の後のことを頼むという言葉を残して死んだ。瑠璃子は自分の家庭の平和を壊した勝平を崩すために莊田家に入り込んだが、結局莊田の家庭を守るようになったのである。

### 3. 『東京行進曲』の早百合と道代

菊池寛のもう一つの話題作『東京行進曲』は面白さの旗じるしを掲げた大衆雑誌『キング』で1928年6月から1929年10月まで連載された小説である。菊池は『真珠夫人』の大成功以後、本格的に通俗小説をかきはじめてが、殆どどの小説が凡作の水準以下であった。『東京行進曲』もその一つである。しかし今日溝口健二の同名の映画と主題歌が菊池の原作よりよく

知られていることのように、この作品の力はそれが紙面の外に移る過程で発揮される。すなわち、雑誌の連載小説から映画へ、また主題歌として形を変えながら様々なルートを経て大衆に近づいた、いわゆるOSMU (One Source Multi Use) を行った作品だとも言える。また小説の形をとりながら大衆に向けての情報の提供・宣伝・広報をしていた点では同時代のメディアという役割を積極的に行ったと言っても良い。このような所から見ると、文学性のほかの方面での平価する価値がある作品であると思う。

‘東京－日本の文化と学問と教養と芸術と、それから罪悪と墮落との集中している東洋唯一の近代的都市。’という文章から始まるこの小説は、最初の文章のように‘文化と学問と教養と芸術’が与えられた有産階級の早百合と、‘罪悪と墮落’が与えられた無産階級の道代、この二人を中心に展開される。

ストーリーは本来貧乏であった少女の道代がいろんな過程を経てブルジョワ階級に編入する物語である。道代は貧乏のため芸者になるが、彼女が持っている優しい心と美しい容貌で二人の男性、良樹と佐久間を魅了する。しかし実は道代が良樹の腹違いの妹であることが明らかになって、道代は崖の下の貧民窟で住んでいた過去を後にして崖の上にある藤本家の屋敷に入り、そして教育を受けにロンドンの女学校に行くことで小説は終わる。一方、もう一人の主人公である早百合は藤本家の令嬢で、女性関係が複雑であった夫のことに苦しめられた母親のことを忘れずに、彼女に近づく数多くの男性たちを弄んでばかりでいた。自分を愛してくれるという確信がなければ結婚しないという考えを持っていた早百合は、様々な類似恋愛をし、結局佐久間と結婚するようになる。つまり、この小説は生まれてから自分が属した家庭から離れ、新しい家庭に移る経路のついでに物語だとも言える。

早百合と道代、この二人はまるで『真珠夫人』の瑠璃子の性格を二つに分け合っただけのようにも見える。その中でも特に早百合は瑠璃子の男女関係についての意見をそのまま引き継いでいる。それは次のような台詞を通じて現れる。

「妾、男性がしてもよいことは、女性がしてもよいと云ふことを、男性に思ひ知らしてやりたいと思ひますの。男性が平気で女性を弄ぶのなら、女性も平気で男性を弄び得ることを示してやりたいと思ひますの。妾一身を賭して男性の暴虐と我儘とを懲らしてやりたいと思ひますの。男性に弄ばれて、綿々の恨みを懐いてゐる女性の生きた

死骸のために復讐をしてやりたいと思ひますの。本当に妾だつて、生きた死骸のお仲間かも知れませんが、そんなものです。」(『真珠夫人』の瑠璃子)<sup>3</sup>

「わたし、恋愛に就いては、かう思っていますの。男のするだけのことは、女もしていいと思っているのよ。今までの恋愛の場合、たいてい女は受け身でせう。男は選び、女は選ばれているんでせう。男は愛し女は愛されるだけなんでせう。わたし、それぢやつまらないと思ふの。女の方から、盛んに男を選んでやりたいわ。」(『東京行進曲』の早百合)<sup>4</sup>

男性の言うとおりに動く女性ではなく、自主性を持って行動することによって却って男性をリードする女性になるべきだと二人とも言っている。彼女たちのこのような言動は当時の読者、その中でも女性にとっては共感を呼び起こすには十分であった。これは男性中心であった家庭と社会に対する叱咤であった。それにこのような主張をしている人が、出身の良い令嬢でありながら、新中間層とかそれ以下の階級であったものが殆どであった読者と同様に、家庭あるいは社会で男性に対して‘受け身’になるということは、読者に‘(自分と)同じ女性’という立場からは共感を、‘(自分より)上の階級’という立場からは権威と説得力を感じさせた。

しかし彼女たちは自分が言ったとおりでではなれなかった。瑠璃子は‘自分の男性に対する意地と反感とでしたこと’で傷ついたのが男性ではない自分の一番愛する女性である美奈子であったことに嘆き悲しむ。早百合も自分が結婚相手を選ぶ前に、兄の良樹から佐久間との結婚の話聞いて、そのままそれを受け取る。恋愛関係でもっといたかったのでまだ結婚はしたくないと言いながらも結婚の話を受け取る早百合の発言には、最初彼女が持っていた結婚に対する反感などは感じることができない。

道代も彼女の意見がはっきり表現されたこともなく、実の親によって藤本家に入って、家長の代理である兄から言われたとおり、結婚を通報されたりまた取り消しを言われたりするが、彼女は何の不満のないまま受動的に与えられた居場所を受け取るだけである。そして貞淑な女性になるための教育を受け、ロンドンの女学校に送られる。

荘田家の家長になる道を自ら選らんだ瑠璃子は、美奈子が自分のように初恋を奪われた被害者になったのを気付いて、家長としての自分の失敗を自覚してしま

う。その一方、早百合と道代は社会的な位置を持っている家長の命令によって全てが決定されるが、それにあまり不満を表すこともないし、家庭の中で瑠璃子のような位置を占めることにも興味はないようである。家長の立場から自分の家族を守ろうとしたが失敗した瑠璃子から、社会的な位置を持っている男性の方へ再び、家庭の主導的な役割が移動したのであった。

#### 4. 文化生活への欲望

『東京行進曲』では藤本家を中心にしていわゆるブルジョワの生活が詳細に描かれている。関東大震災以後、東京はものすごい速さで再建され、‘近代都市’東京に生まれ変わった。都市の拡張と一緒に‘大衆’という言葉が登場し、‘中産階級’という意識が誕生した。都市の中産階級は新しい生活の様式、つまり標準の‘文化生活’をしなければならないという考えが広がり、このような考えは様々なメディアによってもっと強調され始めた。一言で言えば、文化生活は洋式を導入して効率性を高めた、都市の中産階級以上の家庭が求めるべき生活様式だと言われたのである。また、この頃発展を重ねたメディアによって生産された視聴覚コンテンツが‘文化’という名前で提供され始めた。‘文化’という言葉は当時の中産階級、あるいは自分か中産階級に属していると思った人たちにとっては、消費と娯楽の別称であった。

この時期登場した『東京行進曲』は文化生活の標本を読者に提示した。自動車にのってデパートに買い物に行き、外食をし、ペットを飼い、活動を見に行き、ダンスホールで踊る、このような生活は文化生活の一つの例示であった。特に『東京行進曲』の中には、良樹と道代の出会いの発端になったテニスをはじめとする水泳、ラグビーなど、近代西欧から伝わってきたいろんなスポーツが出てくる。これは近代になってからスポーツが、男らしさと女らしさをもっと強調する道具になったことと同時に、教養を計る尺度でもあったことを反映している。

ところで、『東京行進曲』で提示された文化生活を完全に楽しむことができたのはブルジョワのだけであるように見える。安定した文化生活が可能な家庭に抱き込まれる機会が与えられたのはブルジョワの身分で生まれた藤本家の人たちで、彼女たちは自分に与えられた家庭内の居場所にいれば、何の苦勞なしに文化生活を獲得して維持するのができるのである。一方、そのほかの女性たち - 特に職業を持っている女性 - には不倫と墮落という装置が重ねたばかりで、肯定的な文化生活を楽しむ機会はなかなか与えられない。

道代の階級上昇も恋愛によったのではなくて、血縁のためであったことも同じ脈絡で理解できる。ここで出てくるのが道代の貞操についての問題である。道代は窮屈な伯父夫婦のために芸者になったが、貞操だけでは最後まで守り抜く。これは結局道代の新しい人生への鍵になる。男性と肉体関係を持つか、不倫などの関係を通じて文化生活を楽しむほかの職業女性とは違って、道代は貞操についての信念を捨てないことで、ブルジョワの女性としての素養を表す。これは瑠璃子にもあてはまることで、この二つの小説を通して貞操は最高の価値になる。

出身の良い貞淑な女性び要求される貞操という価値に加えて、菊池は近親という要素を入れて通俗小説らしい刺激を与える。近親と純愛の境界を行き来する刺激的なストーリーの展開が、その中に隠れている階級性と家庭内の貞淑な女性への賛美を希釈したのである。

菊池寛のこのようなまれつきの階級を肯定する態度はすでに『真珠婦人』での成金にたいする軽蔑めいた描写を見てもわかる。文化生活の確保のために男性によって指定された家庭での居場所を受け入れる『東京行進曲』の女性たちを通して菊池は、家庭の中に穏やかに包摂された女性だけが教養のある文化生活が可能であるというメッセージを読者に投げる。ここで菊池が階級を肯定しているのと同様、生まれつきの性を受け入れて社会的に与えられた女性としての役割に充実しなければならないという彼の態度が伺える。結局『真珠婦人』での社会に立ち向かった女性はなくなり、位置づけられた自分の居場所に満足してそれにふさわしい役割をはたすのが最高の美德であるという結論が残ったのである。

#### 5. おわりに

菊池寛は彼の通俗小説で殆どの場合、女性が家庭という秩序の中へ入る結論を下す。これは当時の通俗小説が明治の家庭小説の脈を継いでいたことを考えれば理解できる。しかし一連の作品を注意して見ると、結論に達する過程が少しずつ変化することが分かる。

男性の不在によって自由を得たが家族への愛のため自ら家庭のなかにとどまることを決めた『真珠婦人』の瑠璃子と違って、『東京行進曲』の早百合と道代は男性の選択によって家庭の中で新たに位置づけられる。彼女たちは『真珠婦人』の瑠璃子のように社会に対する闘争心を持ったわけではないが、静粛な女性という既存の価値に従うだけで、文化生活ができるようになる。『真珠夫人』の9年後に発表された作品であるが、何の悩みなく家庭という秩序へ入る女性像はむ

しろ時代を逆行して、正しい家庭作りという教訓を目的とする初期の家庭の小説に近いものであった。これはまた家庭での女性の役割、つまり母としてのやくわりとして出産と養育の重要性が強調されはじめた時代を背景にしての変化でもあった。

ここで重要なのは、菊池寛が描いたのは世態の反映である一方、大衆が見て欲しがらる姿であるということだ。小説に描かれた生活と実際の生活の微妙な差こそ、求めることを再現してくれるメディアと作家に対する大衆の忠誠心を高めた。このような背景で大衆に対する掌握力が強まった菊池は、時代にやや反抗的だった女性を描いたことから発展するどころか、批判

的な視線を止めて男性の命令に従って家庭内で位置づけられる女性を描いたのである。これはこの後の昭和期のジャーナリズムの歩みにも示唆する所が大きいと思う。

注

- 1 原文は次のウェブページから参考した。 [http://www.aozora.gr.jp/cards/000083/files/13217\\_18030.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000083/files/13217_18030.html)
- 2 同上。
- 3 同上。
- 4 菊池寛「東京行進曲」、『菊池寛全集』第十巻、平凡社。274p

パケ ジュヨン／淑明女子大学校 日本学科 修士課程